

その1・西区藤棚地区

1 地区の概要―高齢化のすすんだ下町

この藤棚地区（日常利用圏）の面積は約二百四十二ヘクタール（区域の三六・二％）、人口四万人強（区人口の五三％、世帯数約一万九千世帯である。地域の平均人口密度は約百七十人／ヘクタールに及び、西区平均（百二十三人／ヘクタール）に比べても高く、区内で最も人口稠密な地域である。一世帯当たりの人口は二・三二人／世帯で、区平均より高く、ほかより複合的な家族形態が多めである。また、高齢化率は一六・二％（平成四年度）と区平均を上回っており、西区内で最も高齢化が進んでいる地域であり、代表的な下町地域といえる。

北側は、JR東海道線沿いを中心に平坦な低地となっているが、その大部分は起伏に富んだ丘陵地となっている。ほぼ中央を東西に伸びる藤棚商店街は低地と丘陵地の境界線上に位置しており、これより北側の平坦地は戦災復興の区画整理がなされ、南側の丘陵市街地は起伏が激しくスプロールの形成された街で、整然さに欠けるきらいがある。しかし、地域全体としては近隣商店街をもった低層高密度の住宅地の色彩が強く、生活の匂いのする親しみがある街としての性格が強い。

開発経過をみると、地区の全域が昭和四十年以前に既にDIDとなっている。西区全体では昭和四十年以前の居住者が六割を占めており、当地区も昭和四十年以前の居住者が多いと想定される。

この地域にアプローチする鉄道最寄り駅は、相鉄線西横浜駅、京急線戸部駅・日ノ出町駅の三つであり、これら駅から五百メートル圏内にある交通便利性が高い地域は、北側及び東側の野毛山一帯にすぎない。その他の丘陵地の大部分は駅から一キロメートル圏内に入るものの、なかには、境之谷や西戸部町二丁目などの一部では、都心部にありながらバスの利便性さえ確保できていないところがある。

2 地域の課題

藤棚地区の調査は、西区役所の各課の職員に一堂に集まってもらい、地区の性格、課題を話し合ってもらったことから始めた。さらに連合町内会長、個々の地域活動者に対してヒアリングを行った。これらから、この地域共通の課題を整理すると次のようになる。

① 高齢化の進展に伴う問題

先に述べたように、この地区の高齢化率は区内で最も高い地域である。中でも、赤門町

図-1 ゾーン区分地域施設分布図



- 1 地区の概要―高齢化のすすんだ下町
- 2 地域の課題
- 3 住民活動・住民組織の特徴
- 4 地域活動からみた地域施設のニーズ
- 5 まとめ―地区のニーズとその展開プログラム

二丁目は二四・三％、西前一、三丁目は二〇・一％で二割を越えている。介護者の高齢化により、住みなれた町を離れ老人ホームの入居というケースが多く、往診してくれる主治医も高齢化し、また、ボランティアも高齢である。区内ではヘルパーの需要は多いがなり手が少なく、老いを支える若年層が少ないという問題がある。

また、介護者の休養のためのショートステイ施設の不足、病院の不足など高齢者を支える体制が不十分であることが、指摘された。

高齢化問題のもう一つの側面は、四、五十年間住み続けている高齢者である地元住民と新しい住民とのギャップである。新住民は旧住民に受け込めない、などの声が聞かれ、地域の活動も相互に交流がない。

若年家族層の住環境が不十分であるということと同時に、高齢者の圧倒的な勢力が精神的にも若者を住みづらくしているという声も聞かれた。若年家族層を呼び戻すことが、この地区の大きな課題となつている。

② 子育て環境の問題

高齢化の進展は、年少人口の減少と平行している。小学生の生徒数は微減し、一学級三十人程度である。

引越して間もなく子供を生み、孤立したなかで子育てをしている母親の子育て不安が強い、という保健婦からの問題提起ほどの地区にもあったが、とくに、子供数の少ないこの地区では、その傾向は高い（保健婦の取り組みでは、この地区の子育てグループは、0歳児八グループ、幼児十五グループあるとい

うことである）。また、学童期、思春期の子供の母親からは、子供の遊び環境の貧弱さ、伸び伸び遊べる自然環境の不足（西区の被緑地率は七％、市内十六位）、刺激の多い繁華街、働きに出ている親から置き去りにされている子供の問題が指摘された。

③ 施設（町内会館等地元集会所）の不足

MM21地区内の大規模な全市対象の施設が近くにあるにもかかわらず、町内会館を始め、地元が利用できる小規模の施設が不足している。高密度住宅地区が区全体の四七％を占め、未利用地の極めて少ないこの地区では新しい施設の建設は難しく、既存施設の活用が課題となっている。

④ 移動・道路

交通量が多く道路も狭く、さらに坂道の多いこの地区では、老人、車椅子の障害者の移動についての不安が聞かれた。また、坂道への違法駐車が移動の障害になり、障害者の外出を困難にしている。国道沿いのマンション建設に伴う駐車場不足の問題も指摘されている。また、最寄りの鉄道駅へのアクセスが悪いところもあり、循環バスの必要性も聞かれた。

3 住民活動・住民組織の特徴

① 地域活動の現状

⑦ 高齢化した自治会・町内会活動

この地区は三つの連合町内会に分かれている。区役所の位置する第二地区、藤棚・浦舟

通りから東側の藤棚、久保山周辺の第三地区、西側の野毛山・掃部山周辺の第四地区であり（地域施設配置図参照）、計五十六の単位自治会からなる。ヒアリングした西区連合町内会長は、第四地区連合会の会長であり、また、六百二十世帯の境之谷西部町内会の会長でもある。ちなみに、行政の委嘱された役割を上げると、境之谷ログハウス運営委員長、境之谷公園愛護会会長、西区青少年図書館運営委員長、西センター運営協議会委員、西区地域活動ホーム運営委員長、西区社会福祉協議会委員、そしてこの地区の民生委員でもある。

全部で七つの役割を引き受けている。このような役割は、ほとんど区役所からの依頼によるということである。会長は昭和二十四年より居住、この土地に四十年以上居住している七十代の元公務員である。この自治会・町内会活動の現役は、会長、婦人部、西区全体の子供会活動のリーダーなどいづれも、終戦直後にここに住み着いた居住歴四、五十年の高齢者地元住民によって占められている。役所の依頼業務がきわめて多忙な中で「このようなボランティアは、僕の世代で申し訳ないでしょう」と語っている。

⑧ 町内会主導の老人給食会

第三地区連合町内会長も昭和二十年から居住している七十六歳の元エンジニアである。

第三地区では、地区社会福祉協議会、地元の民生委員、保健所の協力で痴呆性老人のデイケア、「カボチャ園」の活動が月一回のペースで、四年近く続いている。送迎のボランティア、食事の係、遊びの相手をする人など、一人の痴呆性老人に対し最低三〜四人のボラン

地域施設の状況

（平成四年十月調査時点）

旧四点セット：藤棚に地区センター（在宅支援サービスセンター併設）の建設計画、境之谷公園子どもログハウス、西前小学校コミュニティスクール、西センター（地区外）

教育施設：（中学校）西中、老松中、（小学校）稲荷台小、西前小、一本松小、東小、戸部小（地区外）

公共施設：西区総合庁舎、障害者地域活動ホーム、浜松町老人憩いの家、勤労青少年センター、老人福祉センター（老松会館と併設で建設中）、一本松青少年の家、県教員会館、県高等学校教育会等

町内会館：東久保町・久保町・浜松町等十八の町内会館・自治会館（整備率五十六・八％）その他：学童保育所（藤棚町）等

の遊び環境に問題を感じている。とくに、公園などで安心して外遊びのできる環境がなく、子供に社会性をもたせるチャンスがないことなど、子供の生活をまちづくりの視点から考えている。

彼らは、新住民であるが、区民会議の委員でもあり、よいまちをつくるためには、旧地元住民とのかわりも大切だ、と考えている。

◎生協活動、牛乳パックの連合会（パック連）の活動も

P T Aの役員、子供会の役員、牛乳パックのリサイクル活動、生協活動をしている四十代の女性たちのグループもある。現在のP T Aの在り方、町内会活動の在り方に対し、自発的に活動しているというより、動員されているといった感じで、新しい感覚が生かされない、と語っている。

② 住民の相互関係―旧住民主導型の活動

昭和二十年代から住み続けている高齢の地元住民が、自治会・町内会組織を基盤として活動を続け、この地区でかなりの影響力をもっている。一方、新住民を中心とした新しい活動もあるが、相互に交流があるわけではなく、むしろ、新しい活動は、他の地区に広いネットワークをもっており、地区内よりは、そちらと連絡をとりあっている。しかし、子育てグループの活動や牛乳パック回収の活動など新住民を中心とした自主的な活動も、町内会館を利用してもらうなどの便宜をはかってもらっており、多少のかわりももっている。

(図1-2参照)

この地区には、積極的に交流の場をコーディネート

ネットする公共の施設、あるいは新旧住民をつなぐキーパーソンも存在していない。その結果、歴史的にかなりの蓄積をもっているこの地域の活動が新しい世代に伝わっていないし、また、新しい住民同士も、同じような活動をしながら相互交流がない。

③ 地域活動と行政

地域活動の種類によって、行政のセクションとの関わりは異なる。

自治会・町内会の役員や行政の各種委嘱委員を中心とする住民のグループは区役所の市民課地域振興係とかかわりが深く、また、この地区の子供会活動の中心となってきたグループは、市民課社会教育係とかかわりが強い。

また、保健・福祉系の活動をしている住民もそれぞれに接触する窓口を持ち、障害児の自主訓練会などは、地域活動ホームの運営をとおして在宅障害者援護協会とかかわり、民生委員、保健指導員は、それぞれ福祉課、保健所と関係し、老人給食会やデイケアの活動は区の社会福祉協議会とかかわっている。

また、ある程度のまとまりをもつようになった自主的なグループは、生涯学級の運営委員会を組織し、三年を限度とした学級活動として十数万円の委託料を受けていることが多い。その意味では、社会教育係とかかわり多くのグループが一度はもっている。

しかし、いずれも、行政の縦割りセクションとかかわりであり、区役所などのセクションともかかわっているのは、七つの役職の委員である連合町内会長など旧地元住民を代表とする住民層である。その結果、実質、連合

町内会長が地域についての行政情報を最も多く知り、行政の協力者として地域の運営についての大きな影響力をもっている。

4 地域活動からみた地域施設の二―ズ

① 主要地域施設の利用状況

◎いつも満員の西センター

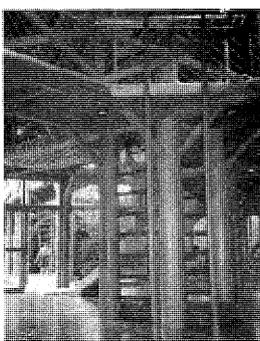
横浜駅に近いために年間利用者も約十三万十四万人と多いが、区民以外の利用が多く、この地域の住民にとっては三カ月先の予約をとらなければならないこと、また、距離的にも遠すぎるといふことで、利用しにくい状況である。境之谷や藤棚の人は野毛の地区センターを利用して利用している。地区内にセンターのない現在では、利用圏は二つに分かれている。

◎交流スペースの欲しい境之谷公園こどもログハウス

ほぼこの地域内の五小学校の子供が利用している。特に近所の子供はよく利用し、親しまれている。運営にかかわっているログスタッフは子供会活動など地域活動の経験者が多く、また、子育てグループも頻繁に訪れており、近所の保育所、小学校の利用もある。

この施設ができたことで、子供、親、子供

こどもログハウス(ちびっことりで)



―ティータム―ログスタッフ経験者―

こどもログハウスのスタッフは「見守り人」という役割だが、けがや危険な時以外は、子どもに手をふれてはいけなく、ということだった。結局、休日に時間をとって子どもと一緒に遊んだりした。もう少し子どもとかかわり、積極的にやりたかった。

公園の隣りで平地にあり集まりやすい老人憩いの家



にかかわりのある活動グループが利用しているので、運営の仕方によっては、子供関連の活動をしているグループのネットワークの拠点になりうるであろう。ある利用者は「親子の交流の拠点になると施設としての深まりがます」と語っていた。

◎利用率を高めるのに悩むコミュニティ・スクール

西前小学校コミュニティ・スクールの利用率は三〇％を割っているが、まだ開設して間もないこともあり、知らない人も多い。どのように使えるかを含め、PR不足が指摘されている。自主事業を開催したり、利用層を開拓している時期、と事務局長は語っていた。

◎人気の高い浜松町老人憩いの家

ゲートボール場として利用できる浜松町公園に隣接しており、年間利用者は八千百七十七人(平成三年度)と多い。そのうち集会所利用の比率は四九％であり、半数以上は個人利用となっている。

平地にあり、便利が良いこと、公園に隣接しているため、ゲートボールや「いきがい作業」(清掃活動)の後、お茶を飲んだり、食事をしたりするのにとても便利と、評判は良い。午後には、将棋、囲碁のグループでにぎわっている。

◎町内会館のような一本松青少年の家

一本松小学校の脇にあり、年間利用者は五千四百四人(平成三年度)と、老人憩いの家よりは少ない。勤労青少年や学生の利用はなく、成人利用(七二・五％)と小・中学生利用(二七・五％)となっている。成人利用では町内会館的な利用が七〇％を占め、

小・中学生利用では九一・六％が小学生利用となっている。

◎グループ活動に開放されている区役所会議室

区役所の会議室も活動グループに貸し出されている。登録団体に限られるが、かなり頻繁に利用されている。

②地域活動と施設ニーズ

⑦具体的ニーズ

ヒアリングしたグループの施設への要望は、具体的に細かい、が以下のとおりである。

◎ジュニアリーダーズクラブ

板の間で、夜十時頃まで利用できる施設がほしい。町内会館は狭すぎ、公共施設は時間が短い。青少年の家は厨房がなく、使いづらい。深夜までビールを飲みながら歓談できるセンターがドイツにはあったが、とても使いやすい施設だった。

◎公園の利用者

自転車乗り、ボール投げはダメ、煮炊きダメなど禁止事項が多く使えない。おもしろくない。

ゲートボールと子供の遊びの利用がかなりある。たいてい、ゲートボールが優先される。

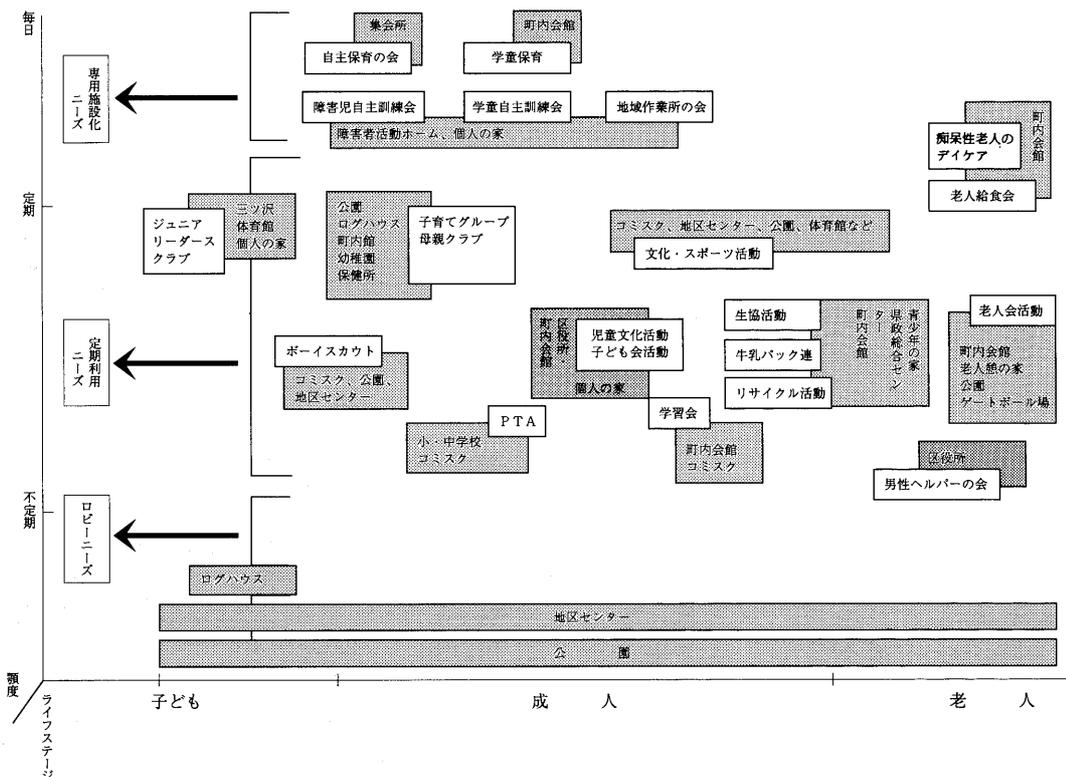
◎町内会活動

第一地区、第二地区に町内会館がなく、活動がしにくい。幾つかの町内で共有してでも会館を建てたい。町内会館があると、子供会活動も老人給食も活発になる。

◎痴呆性老人のデイケア

町内会館を利用しているが、悩みはトイレ、冬は暖房がきいて暖かく、集まりやすい平地

図-3 地域活動と施設利用の実態



にあるとよい。

◎老人給食活動

町内会館がないところは、個人の家を利用したりしているが定期的に安定して利用できないと、進まない。

◎子育てグループ

あちこち転々としている。できれば、拠点的に利用できる場が欲しい。

ログハウスは、雨の日に利用するが、お弁当を食べさせてもらえないので、個人の家に行く。町内会館は、気を使いながら利用。場所によっては、町内以外の人がいると利用できない。

◎学童保育

町内会館を利用しているが、遊び場や騒音問題などがあり、たとえば、学校の空き教室などを利用したい。

◎老人会

ゲートボールをした後、気軽にお茶飲みができ、平地で集まり易いところがよい。浜松町老人憩いの家がとてもいい場所にある。

老人の介護にあたっては、家族を休ませるためのショートステイホームも身近なところには是非ほしい。

◎自主訓練会

地域活動ホームがやっとできたが、常駐できないのに、人手と経費を取られる。個人の家で活動するほうがいいかと思ってしまう。

◎リサイクル活動

町内会館を利用しているが、リサイクルヤードを設置してほしい。

◎生協・パック連

気を使いながら町内会館を利用している。

④施設の三つのニーズとその不足

ヒアリングした活動グループと施設利用の実態は図1-3のとおりである。横軸には活動の種類をライフステージによって取り、縦軸を利用頻度でとった図である。多くの活動は、固定した施設を利用している訳ではなく、その時々都合でいくつかの施設を利用しているが活動が安定してくると、定期利用ニーズをもつ。また、自主保育、学童保育、地域作業所などは毎日利用しており専用利用のニーズがある。また、公園やログハウスのように目的もなく個人でふらりと利用するロビーニーズもある。恐らく、どの地域コミュニティにもこれらの施設ニーズが程度の差こそあれ存在しているのであろう。いずれにせよ、この地域は、施設が圧倒的に不足し、いずれのニーズも充足されていない。特に、身近で気軽に利用できる場が求められている。

5 まとめ—地区のニーズとその展開プログラム

①—地域資源を生かしたコミュニティ施設の整備

この地区は坂道が多く、また老人も多い。生活圏は歩いて三分圏が適当であり、小規模集会所のニーズが強い。空き地の少ない、この地区には地域資源を活かしたコミュニティ施設の整備が必要となろう。例えば、空屋の借り上げによる集会所の設置、この地区に特に多い銭湯施設におけるデイケアなどが有効ではなからうか。(六十六頁、図1-2参照)

また、専用施設ニーズに対しては、ミニ・

コミュニティ施設補助事業などの新しいメニューが考えられる。

②—地域住民が必要に応じて、相互に交流しあう場としての施設機能の充実

現在、この地区には中心となる施設がないが、地区センターおよび在宅支援サービスセンターが市営藤棚住宅と併設で建設予定であり、主に、地区センターにおいて、ロビー機能の充実や活動グループの交流、育成が積極的に図られることが望まれる。とくに、旧地元住民と新住民との無理のない交流、地域のニーズに対応した自主事業の展開などが、新しい人材を発掘し、地域のまちづくりの機能を高めることになろう。また、在宅支援サービスセンター、コミュニティ・スクールについても、地域のまちづくりとの関わりをもった柔軟な運営により、地域コミュニティのニーズを充足できるプログラムが積極的に展開されることを望まれる。

③—区役所におけるまちづくり機能の必要性

地域課題であげられた問題は、道路、交通、住環境整備などまちづくり全般にかかわる問題であり、これらの問題点のきめ細かい把握と対応が、区役所と事業局との連携の下に検討されるべきであろう。

△ヒアリングは、村上佳江、中川久美子が実施、地区概要は内海宏が、以降の文章は中川がまとめた▽

坂道を登る老人

